湘南学園だより
No.108
発行
湘南学園
学園だより
編集部

創立75周年に寄せて

理事長　小田　拓也

現在、75周年イヤーが進行中です。去る、10月22日75周年記念行事として本場中国から風雷劇団が公演が本学アリーナにて挙行されました。是非とも観賞の機会をと思い楽しみにもしていましたが、生だからこその臨場感、迫力にあっと言う間に公演。この日は、本学が日頃からお世話になっている周辺にお住まいの方々、本学の子供達、保護者、本学OBの皆様にも多数ご参集いただき、京劇を媒体に大変活気に充ちた一日となりました。と同時に本学が、いかに多くの皆さんから支えられている存在であるかということを実感した一日でもありました。関係者の皆さんには、心より御礼を致したいと思います。

75周年の本年、湘南学園の今日までの変遷を振返ってみますと、その道程は決して平坦ではないことを裏付ける事象が数多くありました。先達の方々の知恵と努力で時々の困難を克服されてこられましたが、私学にとって現在の社会環境の変化は、過去の事例が当てはまらない次元にあるといえます。こうした状況に際して、はっきりとしているのは過去にしがみつき同じ施策を繰り返すことを続けていると、衰退が間違いなくやってくることです。変革に対して勇気をもてないと、これがブーメランのように自分達自身に降りかかってくることが、経営危機に陥った私学のみならず企業や自治体の事例を見ればあきらかです。（あえて個体の名称をだすことは致しませんが…）

次の80周年、100周年に湘南学園が、私学教育による社会貢献が果たせる為に、本学に関る皆様の衆知を信じて75周年イヤー締め括りを目指します。

創立75周年記念京劇公演開催となる

北京風雷京劇団湘南学園公演実行委員会
委員長（中学校高等学校校長）古市好文
副委員長（湘南学園PTA会長）戸田　恵

去る10月21日午後、東京での公演を終えた北京風雷京劇団一行約30名が湘南学園にやってまいりました。荷物の搬入や舞台設営等を終えたその夜、湘南学園公演実行委員会は劇団一行を迎えて歓迎会を催しました。

翌日10月22日、学校教職員とPTA役員の方々の協力を得て公演開催となりました。午前中に舞台裏で、メイク等を鑑賞するなど事前エントリーの希望者による交流会がもたれました。そして、午後1時半に第一回目（対象が小学校児童と幼稚園児とその保護者）、午後4時に第二回目（対象が中高生徒とその保護者、同窓会、近隣住民の方々等）と、二度の公演開催となりました。観劇された皆様方からは好評の声が届いております。

今回の京劇公演は、湘南学園創立75周年のお祝いとして学校法人湘南学園と湘南学園PTAが共催したものです。東北仙台から九州地区までの10数カ所で、中国の伝統文化の一つである京劇の全国公演が日中平和友好条約締結30周年にあわせて開催されることになり、この機に湘南学園でも実現の運びとなりました。北京市の国家一級の劇団を迎えて交流できたことは、今後ますます求められる国際化の一環としても、また広く伝統文化に親しむ意味でも大いに喜ばしいことであったと思います。

湘南学園は、創立75周年を迎え、四分の三世紀を経てさらに新しい学園づくりを目指しています。今回の公演は記念行事として開催いたしましたが、関係者各位のご協力とご協賛を得て実現の運びとなりましたことを、また観劇に足を運ばれました全ての皆様方に、この紙面をもって御礼申し上げる次第です。

創立75周年記念式典　学務報告

学務担当常務理事　古市好文

湘南学園は1933年に藤沢鵠沼松が岡で、設立されました。小学校児童3名からの出発でした。翌年の在校生は小学生34名、幼稚園児22名です。小学生が100名とならず、経営的に厳しい状況が続きました。

戦後になって慶応幼稚舎から、児童文学者の宮下氏が園長として迎えられます。ロマン主義的で企業家精神に富んだ宮下園長の下、中学校そして高等学校が設立されました。又、当初から特定のオーナーを定めない学園経営とPTA活動が本格な始動となりました。この活動が模範的なPTA活動として全国にラジオ放送で紹介されました。

松林の中の校舎と、「湘南湖」や「湘南砂漠」の異名をとった砂地の運動場で、この時代に慶応高校や湘南高校に進学する「湘南の名門」となりました。

創立25周年となる1958年、慶応大学から教授在任のまま大久保氏が園長に迎えられました。大久保園長の下、湘南学園の「建学の精神」となるフレーズが形成されます。「人生というものを自主独立の気概をもって貫いてほしい」「気品の高い、そして人に愛され、…それに値する体力をもち、実力をもつ人物たれ」、「来たる平和と福祉の新しい時代に、世界の日本、人類の平和としあわせのために勇気をもって、それをなしとげる人になっていただきたい」云々と。中高では1960年から放課後進学補習教室を開始し、年7、8回高校生に模試を受けさせる等進学指導体制をスタートさせ、この頃に制服も定めました。

県の要請もあって、戦後ベビーブームの中学卒業者を高校に受け入れました。それまで小、中、高ともに2クラスでしたが、高校だけがいっきょに増えました。しかし1970年代初めには、その高校が募集難となり財政的危機に頻することになります。アットホームな環境維持も困難になったと思われます。

1970年代から80年代にかけての宗園長後半の時代に、学園再生の動きとなります。

1979年に中高の教員組織を一本化し、高校入試から中学入試にシフトして、中高一貫教育をスタートさせました。創立60周年の1993年には、各学校長兼任の園長を学校長と学園長とに区分する等機構改革を実施しました。中高では進学指導の研修と1990年からスタートした特別教育活動の着実な展開により、名門復活の願いも声となってきています。12年前から高校の募集を停止し、昨年県部局に「併設型中高一貫校」の届けをし受理されました。2004年に中高の新しい校舎とグランドが新しい制服をともなって完成しました。又小学校でも1993年、2クラス80名から3クラス108名へと一学年定員増の積極策を採り、募集が安定してきました。そして幼稚園では、数年の過渡的措置を経て、2007年度に二年保育から三年保育へと転換しました。

現在中高1167名、小学校648名、幼稚園179名、総計1994名の在籍数であります。111名の専任教職員、これに非常勤等を含めて179名の教職員を擁する中等教育までの中規模の総合学園となりました。全学教職員の校内外研修の増加、高校進学学習合宿の実施、大学教員を招いてのデモンストレーションレッスンの実施、小学校主要教科の授業や保健室のスーパーヴァイザーによる再構築の動向等、一定の積極策が図られています。

本学園のリベラリズムと進歩的な気風を基調とした「社会の進歩に貢献できる、有能な人間の育成」という建学の精神にたちかえり、各学校が教育内容の検討をすすめ、授業を中心とした指導力の引きあげを図ることが課題であります。各学校それぞれが募集という入り口、進学という出口に主体的に責任をもち、かつ公正で適正な学校間の連結を図ることが急務となっております。

今年9月に中高校長は、オーストラリア・メルボルンの独立系私学二校の校長と友好関係を結びました。約120年の歴史をもつエリート伝統校のヘイルベリーと、26年目を迎えた新興の進学校ノックスです。二校ともインターナショナルスチューデントを受け入れており、小学校を併設する男女共学校です。ヘイルベリーでは幼稚園もあります。中高では、4年前からカナダ語学研修プログラムを夏期に実施し、来年3月から韓国研修、そしてこのメルボルンの友好校と交換留学をスタートさせ本格的に国際教育に取り組みます。

歴史をたどると、湘南学園は創立当時から、小学生にデンマーク体操を教えたり、「ドレミファ」が厳禁の時代に独語の音階で授業をしたり、太平洋戦争勃発となる頃まで英語を教えていました。そして小学生への英語授業は終戦2ヵ月後復活しています。高校では、米国からの留学生受け入れも1960年からスタートさせています。

開明的国際教育の基調を強めることは、a new era of "recentering Asia" without leaving the West (Northeast Asia's Stunted Regionalism, Cambrige University Press, 2004.P358)、即ち「脱欧せずに再入亜する新しい時代」にあって重要な課題であります。多くの高校生が外国の人々を前にして、英語で特別教育活動のフィールドワークで得た知見をプレゼンする姿を夢みたい。

80周年には、「湘南の名門」をといわれるにふさわしいその第一歩を踏み出していたいと思います。皆様方の応援と声援をお願いする次第です。

国際教育検討の経過について

中学校高等学校　学校長　古市好文

一、特別教育活動と国際化

2006年6月5日発行の学園だより第100号で「地域から学ぶ特別教育活動」について述べました。「特別教育活動のスタートは1990年です。19年目を迎える特別教育活動は、特性のある「進学校」と表明するにふさわしい歴史をもった教育です。」とし、後段で国際化への対応について次のように述べました。

「国際化」の一つとして、「カナダ語学セミナー」が実施されました。

「英語」は、アングロサクソン系の言語ではなく、国際共通語となり、生活用語だけでなく、概念によってコミュニケートする手段となっています。語学自体のスキル・アップも必要です。それと同時に、コミュニケーション能力を高めることです。そこに概念認識と、構造的分析的で、科学的な認識が要請されるはずです。文書読解や解釈能力は欠かせないことですが、自分の頭で概括でき、かつそれを伝達し表明する力、文化する力こそが大切です。授業でもそうですが、この活動では学習する主体こそが「いのち」です。そもそも、学ぶとは学びあうことです。…

現在の特別教育活動は、生徒たちに、世界の人々と様々な交流を通じて、そこから学びとる機会を多角的に与えているとはいえません。教員自身が国際的な視野をもつこと――これがスタートでしょう。国際協調、とりわけアジアの国々との関係が重要である思潮は、各方面で顕在化しております。インターナショナリズムという観点で、国際社会を見つめる実際の場をどう設定するか。又、地球規模という意味でのグローバルな視点で、自然環境保護やそれとの共生、持続可能な発展など、様々なテーマへのアプローチをどのようにすすめていくか。新しい実践の展開がなされるよう、この二年間で模索しつつ、その第一歩を踏みたいと思います。

二、国際化の新しい流れ

私は、今年3月の高校卒業式の式辞で、米国のサブプライムローン問題に言及しました。約30年間続いた米国発のニューエコノミー、マネタリーキャピタリズムですが、現在世界同時不況と、南北問題に加えて南々問題、そして先進国内での格差問題がクローズアップしています。

今年度私は、月2～3回の割合で夜に、ある大学院棟の一室で、「東アジアにおける地域的な統合の可能性」に関するケンブリッジ学術業書等の読みあわせと討論に参加しています。今年ノーベル平和賞を受賞されたアハティサーリ元フィンランド大統領と親密な一人である日本の国際政治学者の指導下、中国2名、韓国2名、ウズベキスタン1名、沖縄文化研究員などを含めて日本人4名による演習形態です。東北アジアの日、中、韓、ASEAN、さらにオーストラリア、ニュージーランド、そしてロシアに加えてインドも参入する東アジア・太平洋で、経済統合と社会的相互依存の進展する時代となっています。これからの国際化は、そのプロセスに様々な可能性と変遷が考えられるとしても、一定のペースで着実に地域統合をともなって展開されていくであろうと思います。

三、国際教育への検討と第一歩

今年度教員組織内に小さな国際化委員会をつくりました。国際教育について検討する組織です。特別教育活動にあわせて、地域から世界へ視野を広げる発達段階に沿った国際教育プログラムの検討です。この検討は来年度まで継続させて、一定のプログラムの設定を図りたいと考えています。

まず、2005年度から始めて4年間を経た「カナダ語学セミナー」については、来年度も継続し、5年間を経た2009年秋頃に総括的に再検討します。希望者が多く次年度になる生徒もかなりいました。カナダは「英語圏」で資源立国、かつ先進国になって日本との関係も強い国です。ホームステイの拠点はエアドリーという小さな町ですが、「語学研修」を主体としたものとして意義があります。学校内での語学＝英語教育の充実との関係のなかで、希望者によるとはいえ、このような形態での海外「語学研修」を位置づけることも必要と考えております。

今年度から春休みに「韓国セミナー」を実施します。この研修は韓国語のみではなく、現地の人々との交流や異文化体験をおこないます。但し、今年度は準備接渉の時間がなく、現地の学校との交流が実現しませんでしたが、何らかの形で交流を追求してまいります。この研修参加者は、韓国語に興味を持つ生徒を含めて、春休みにソウルに行くまでの10回の講座で事前に韓国語を学習します。講師は釜山大学・大学院を卒業し、現在日本の大学院博士課程・研究生である方にお願いしております。

又、私はこの夏にオーストラリア・メルボルンに出向き、いくつかの学校を訪問してきました。将来的に兄弟姉妹校となる学校を探すためです。何故オーストラリア・メルボルンでしかも独立系私学なのか、次の通りの条件があるからです。

(一)国際教育のメインメンテナンスは英語という国際語のヒアリングとスピーチが前提となる。英国自治領以来の「英語圏」の国である。

(二)白豪主義をやめてから35年を経ており、移民の受け入れにより当時1000万の国が今や3000万をこえるインターナショナルな国になった。今や学校はさながら「英語圏」でありながら、英語でコミュニケートするインターナショナルスクールである。

(三)資源供給を基盤に経済発展をした先進国であり、東アジア圏に組しており、日本との関係が現在もこれからも継続され強まるであろう。そして治安が極めて良好である。

(四)大学の学費は国家政府が支出し大学生はよく勉強する。VCEというIB(インターナショナルバカロレア)と同質の高校卒業資格によって大学の進学先が決まるが、その進学をかかげる学校教育機関は

教育に熱心である。学習に力を入れ、スポーツ、芸術等も大切にする気風がある。メルボルンは、オーストラリアでは伝統的に文化・芸術の府であるといってよい。

（五）オーストラリアでは、政府が仏・独を含めた欧米や華人などアジア各地のインターナショナルスチューデントを受け入れている。独立系私立学校が全体の9%であるが、いずれも経営に努力しており進学に熱心である。その点日本の私立進学校と類似する。

（六）湘南学園と同じように小学校を併設する中高校もあり、学校間交流は中高だけでなく将来的に小学校も、そして幼稚園も、さらに教員間でも可能性をもてる私立学校も存在している。

四、Friendship Agreement

対象校をメルボルンに定めて、公的機関と公的関係者からの非公開の情報も入手し、事前連絡接渉の上メルボルンの数校を訪問しました。別学である伝統エリート校と新興の男女共学進学校、あわせて二つの学校と2008年9月にFriendship Agreementを結ぶに至りました。

ここで、1つのエピソードを紹介しておきます。

4日目の午後に訪問した「HAILEBURY」は、メルボルンにむけて出国する4日前に、訪問の受け入れのオファーがありました。その理由はどうも学園の評価について内部で意見が定まらなかったようなのです。学園は一定の歴史があるが、進学実績等を含めて社会評価がそれ程高くない。そういうことが訪問受け入れオファーを遅らせたのではないか、ということが接渉によって判明しました。ひとまず会ってみようかということです。それを想定して、当方から校長宛に次のようにメールを送りました。

「当校は特別教育活動という授業外のカリキュラムを持った教育活動を進めており、すでにそのカリキュラムは20年を経ています。これは、フィールドワークによって福祉・環境・地域・人権について考える機会を持つ活動です。私は国際教育を指向して、今年度から小規模ながら国際教育委員会を教育組織に作りました。3～4年後には、上記の特別教育活動のプレゼンを本校の生徒が兄弟姉妹校の生徒さんたちの前で行うという姿を理想として描いております。交換期間については、当初は2週間程を　考えたいと思っています。是非、これを機会に兄弟姉妹校として提携していただけたら幸甚です。本年9月中には、提携協力を約束し会う学校を定めたいと思っております。」

当日、校長とお会いした時、今後両国の国際関係について話がはずみ、それとともにインターナショナルの教育環境や生徒たちの認識の発達について話し合うことになり、非常に友好的な場面になりました。帰国してKnoxとともに、この校長宛に申し入れを送りましたが、早速返信のメールが届きました。まずは語学部長が来年度7月頃学園を訪問することになりました。又、Knoxでは、副校長夫妻が来年度4月初めに来校します。

五、今後について

今後については、下記の両校と双方のオファーについて相互検討を続け、実務的な連絡をすすめながら、国際教育プログラムの主要な枠組みとして整備したいと考えています。現在のところ、カナダセミナーは中学生と高校1年生を中心に、メルボルン各校への「短期交換留学」は高校生を中心に開始したいと考えています。単位互換を前提とする年間のexchangeも整備してみたいと思っています。さらに、DVD、IT等を用いての作品や意見交換の設定等広範な交流も時間をかけて考えられます。

今年の12月下旬には、神奈川県私立中学高等学校協会が協力している中国政府招聘事業の中国（大連）の学校視察に中高企画主任＝国際教育委員会責任者を派遣します。今後は中国も視野に入れたい。ちなみに、神奈川県と遼寧省（大連）は友好関係を結んでいます。英語だけでなく神奈川県職員には中国語ができる人が増えていること、川崎市では英語とともに韓国語ができる人が増えていることも付記しておきます。

《友好協定締結校紹介》

Haileybury

オーストラリア・ヴィクトリア州メルボルン市南東の郊外に位置する、1892年創立の伝統ある独立系の私立学校（Independent School）である。幼稚園（約150名）も併設しているが、学校としては小学校から中等学校（11年生から12年生）までの総生徒数3000名、総教員数350名の一貫教育校である。4年生までは男女共学であるが、5年生からは同じキャンパスながら男女別学となる parallel education（平行教育）と1クラスの人数を18名以内（12年生は15名以内）に制限する少人数クラス制を採用している。男子学校は Haileybury College、女子学校は Haileybury Girls College と呼ばれている。学力面では、VCE（Victorian Certificate of Education・ヴィクトリア州教育証明書）のスコアにおいてほとんどの生徒が上位20%以内、半数が上位10%以内、上位1%以内にもかなりの生徒が入るという素晴らしい実績をもっている。また、スポーツ、音楽、演劇、社会的・文化的活動にも力を入れている。国際交流も盛んで、ヨーロッパ、アジアなど外国からの留学生も多く受け入れている。日本の難関大学付属中高が提携しているMelbourne Grammar や St. Micheals と肩を並べるオーストラリアの名門エリート校である。

The Knox School

オーストラリア・ヴィクトリア州メルボルン市の郊外の緑豊かで穏やかな地域に位置する独立系の男女共学の私立一貫校である。1年生から4年生までを Junior School（小学校）、5年生から9年生までを Middle School（中学校）、10年生から12年生までを Senior College（高校）に分けており、総児童生徒数は約800名である。1982年創立というまだ歴史の浅い学校ではあるが、進学率でヴィクトリア州のトップ10に何度かランクインしたことのある進学校である。やはり少人数クラス制を採用しており、1クラスを15名から24名に抑え、生徒と教師がふれ合う機会を多くしている。スポーツ（特に乗馬が有名）、音楽、演劇、ダンスなどにも力を入れ、アウトドアアクティビティも重視している。国際交流のプログラムを持ち、留学生も多い。ダイバーシティを校是とし、多様な文化を持つ生徒が多くいることが学校の強みである。また、生徒、教師、保護者間の開かれたコミュニケーションを尊重した教育の取り組みは湘南学園の校風と教育目標にも通じるところがある。新しい学校であるが、着実に教育実績をあげ、社会的に高く評価されている。

第58回中高学園祭を終えて

～今回もみんなが一体となって取り組めた学園祭～

これからも「あなたも一緒に」楽しめる学園祭を！

生徒会指導主任　緒方哲也

今回で第58回を迎えた中高の学園祭は、ようやく暑さも一段落した9月27(土)・28日(日)の両日にわたって行われました。当日は天気もまずまずで、多くの外来者の方を迎えることができました。今回の学園祭のスローガンは「POP UP!～あなたも一緒に～」。このテーマには、学園祭に来てくださった皆さんにもその楽しさを味わっていただき、私たちと一緒に弾けましょう!という意味が込められています。

こうしたテーマを始め、学園祭を盛り上げるための様々な企画は、実行委員の幹部の生徒諸君を中心に、今年4月からの会議で決めてきたものです。高校生の実行委員と生徒会総務委員を中心とした学園祭実行委員幹部の生徒達は、今回の学園祭成功ために献身的な活動をしてきました。この生徒諸君のエネルギーには、毎回のことながら驚かされるばかりです。今回も中1から高2までのすべてのクラスで参加する企画が出そろい、アミューズメントパーク系から映画系、RPG系、思考を凝らしたお化け屋敷、そして高2のあるクラスでは教室内に模擬法廷も出現し、個性あふれる企画が目を引きました。

そして、毎回創意工夫を凝らした食べ物で人気の食堂・屋台には3クラスが挑戦。今回は食堂・屋台を希望するクラスがいつもより少なかったのが残念でしたが、それでも売れ行きは上々だったようで、外来者の方が美味しそうに生徒の作った食べ物をほおばっている姿を見て、私たちも嬉しくなりました。クラブの展示やパフォーマンスにも多くの方が足を運んでくださり、大きな拍手をもらって生徒達も大変満足そうでした。

今年はまた、地域の方々にも参加していただきました。アリーナの入口付近ではテントの下でのフリーマーケット、グランドでは地元のフランス語教室の先生の指導によるペタングの球技を、家族みんなで楽しむ姿を見ることができました。2日目の日曜日には、PTAのバザーも開催されて、学園一帯は祭り一色に彩られ、生徒や先生・保護者の皆様、そして地域や外来者の方々が一体となった素晴らしい瞬間でした。

こうして学園祭は盛大に行われましたが、今後は自由参加数の枠をどうするのかなど、来年度の実施に向けた課題も少しずつ見えてきた学園祭でもありました。これからの学園祭も、集うすべての人が楽しめて、「あなたも一緒に」「POU UP」できる学園祭であるということを願ってやみません。生徒会ではもうこの時期から、来年度の生徒会行事をどうするのかについての議論を始めています。今回の学園祭の実施で生徒諸君が学んだ多くのことを、これからも大いに活かしてもらいたいと思っています。

高2研修旅行

北の国のあたたかさ

伊藤眞哉

北海道コースは、北の大地ならではの大自然に触れるとともに、その土地で暮らす方々と直にふれあうことをテーマに、旅行委員の諸君とともに行程を考えてきました。お世話になった標津町の皆さんは我々のことを実にあたたかく迎え入れてくださり、各酪農家のお宅での民泊も生徒諸君にとって貴重な体験になったようです。十月下旬にして、朝晩はすでにこちらの真冬並みの気候に包まれていた北海道でしたが、だからこそ人の心のあたたかさが胸にしみる旅になったのだと今になって改めて感じている次第です。

聞いて観る旅

青木幸久

「見物と観光の違いは何ですか。」初日の夜、薬師寺僧侶、村上定運さんの問への答えは22日夜、洛中での法然院貫主、梶田真章さんの講話にありました。

今回の関西（奈良・京都）の旅は日本の文化・伝統を考える旅、聞いて観る旅でした。見物はただ物や事象・風景を見ること。

では「観光」とは？

深く考えて観察し体験することで、「光を心の目で観る」新たな発見と感動を実感すること。

この旅で、「観光」の真の意味を理解し、新たな発見と感動を実感してくれたことでしょう。

最後にこの旅を支えてくださったすべての皆様に心から感謝いたします。有り難うございました。

九州・長崎研修旅行を終えて

鎌田利彦

今回の長崎コースは青島での民泊体験で、その様子をお伝えしたいと思います。

わら草履作りでは何度も作り方を熱心に聞き返しながら作り、巻き寿司作りでは、指導者の方の上手な巻き方に感嘆の声を上げる姿が印象に残りました。そして、田舎料理体験では、しっかりレシピのメモを取って、指導者の方に対して、「お母さん、うまくできたでしょ。」と楽しそうに、まるで本当のお母さんに話しかけているような生徒もいました。また、釣り体験では、初めて釣りをして苦労している生徒もいました。そういった様々な体験を通して、島で生きる人々の心に触れて、私たちが忘れていた物を思い出したのではないかと思います。

私は生徒たちがこの青島での生きた体験を経て、澄んだ、温かい青島の心を湘南学園に持ち帰って、必ず生かしてくれることを期待しています。

沖縄…“命どう宝”の想いを胸に

有薗和子

「いめんしょり伊江島へ！」……この素晴らしい横断幕、そして島の笑顔出迎えに大感激の生徒たちです。湘南学園のかわいい生徒たちは、ひととき「島の子」です。各ご家庭に様子を見に行くと、「先生！私たち、一秒も無駄な時間がないんです！」と満面の笑み。「この子らは何でも一杯食べて、とってもいい子だねぇ！」“おかあ”たちにも大評判でした。人の温かさ、自然の美しさ、そして“命どう宝”の祈りを、たっぷりと胸に刻んだ50人です。

北海道コース・小樽運河

沖縄コース・守礼門

長崎コース・平戸大橋

関西コース・宇治平等院

中3研修旅行を終えて

中3学年主任　吉川謙太郎

11月4日、新横浜駅から新幹線に乗り、中3旅行団は4泊5日研修旅行に出発しました。

広島駅で降り、まずは、バスで山口県岩国市に直行。錦帯橋と山上に聳える岩国城をバックにしてクラスごとの集合写真を撮り、その後、錦帯橋をわたってロープウェイで岩国城に「登城」。岩国に別れを告げてからは、初泊地の周防大島へとバスは進み、1日目は終わりました。

2日目は、今回の旅行のメインともいえる周防大島での体験学習です。好天にも恵まれ、11のコースに分かれた生徒諸君は、それぞれ午前・午後の体験を十二分に満喫していました。「カヌー体験」では瀬戸内海をわたって近くの小島まで行き、「みかん収穫体験」では美味しいみかんを食したりジュースにしたり、「建て網漁体験」では自分たちでとった魚を港で料理し、「カキ打ち体験」では養殖イカダからあげたカキを取り出してバーベキュー、「石風呂体験」では伝統的な"サウナ"で汗を流し、「ぽんぷら飯づくり」では竹林から切り出した竹にご飯をつめて焼いて食す・・・などなど、とても密度の濃い内容でした。周防大島町職員や地元インストラクターの皆様の全面的なご支援・ご協力のもとで、楽しくてためになるひとときを過ごすことができたと思います。

3日目は、まず、日本三景のひとつである宮島に渡りました。このとき、船中で多くの生徒諸君が同乗した小学生のために席を譲ったことのことで、あとからその小学校の先生にあつく感謝されました。「こんなところにも成長の証が出ているのかな?」などと思い、もみじまんじゅうを買いあさる生徒諸君をみながら、私はひとり上機嫌になったものでした・・・。その後、広島に入り班別行動をしたあと、被爆された方のお話しを伺い、平和資料館を見学しました。生徒諸君は原爆の恐ろしさや平和の大切さを率直に感じたようです。また、有志によってつくられた折り鶴や寄せ書きが「原爆の子の像」のところに供えられました。

4日目は、愛媛県の「しまなみ海道」に足を伸ばし、午後に体験学習をしました。「ジャムづくり」ではみかんジャムなどをつくり、「タコ釜飯」ではとれたてのタコをつかって美味しい釜飯をつくり、「郷土料理づくり」ではイギス豆腐やトコロテンなどをつくって食すなど、ここでも多くの地元の方々のお世話になりました。

5日目は、呉の「大和ミュージアム」に立ち寄りましたが、見学時間が少なくなってしまい、少々残念でした。・・・そして広島駅に着き、初日からお世話になったバスガイドさんや運転手さんと名残りを惜しみつつ、帰りの新幹線に乗り込むことになりました。

今回の旅行は、かなりハードなスケジュールでしたが、大きな事故もなく、とても良い旅行になったと思います。もちろん、多くの方々のご協力をいただいてこそのことです。この場を借りて、旅行を支えてくださったすべての皆様に感謝いたします。

生徒諸君にとっては、この旅行を通して、自分という「畑」のうえに、多くの種がまかれたはずです。その種から良い芽がでるように、学校に帰ってからも自分を磨き続ける努力をしてほしいと思います。また、いろいろな場面で、多くの人情にもふれたことでしょう・・・そこで持ったであろう素直な感謝の心も忘れないようにしてもらいたいものです。

私は、いま、旅行が無事に終わってホッとしているところですが、同時に何ともいえない寂寥感にとらわれています。日常生活への「切りかえ」が大事だということは、生徒にも言ったのですが・・・。

輝いた　たいいく表現まつり

児童会・行事主任　小林大介

宝詳です。
ます。
取まつ
つたこ
行委員

"住て　今回のたい
こりのテーマを「輝
を企画運営しました。

学園歌

放送委員会は、競技中に音楽
流し、実況放送をしました。

「ぼくも・わたしもやってみたいな！」

年少組

年少組の一年間では、自分のありのままの姿を受け入れてくれる先生がいることで、幼稚園も家庭同様安心して過ごせると感じられることを何よりも大切に過ごしていきます。

一学期は安心できる環境の中で、自分のしたい遊びを見つけてたっぷり遊びました。二学期になると、身の回りのことが自分でできるようになり、日常生活の中でもだんだんと自信を持ち始めました。次第にその場に居合わせた友達に気付いたり、意識したりするなど、視野も広がってきました。そんな中で経験する初めての「らんらんにこにこらんど」（運動会）では、当日に向けて特別な練習をするのではなく、今までの園生活で経験してきた“走ったり”“跳びはねたり”“よじ登ったり”“踊ったり”するなど、子ども達が大好きなことをプログラムに取り入れることで、自分から「やってみたいな。」という気持ちになれるよう導いてきました。当日は大きなアリーナで年長児・年中児が行う姿を実際に目にすることで、「お姉さんがやっているバルーンやってみたいな。」「お兄さん、かっこいいな！」とたくさんの刺激を受けました。らんらんにこにこらんど後は、お兄さん・お姉さんにバルーンを教えてもらったり、バーベルを一緒に持ち上げてみたり…と、楽しかった余韻を味わいながら、憧れのお兄さん・お姉さんとの触れ合いも増えてきました。

初めての大きな行事を経験したことで、年長児・年中児から多くの刺激を受け、「ぼくもやりたい！」「わたしもやってみようかな。」という気持ちがますます育ってきている年少児、これからも子ども達のたくさんの「やってみたい！」を大切にしながら、主体的に取り組んでいく芽をさらに育てていきたいと思います。

「園外保育にレッツゴー♪」

年中組

「園外保育にたくさん出掛け、幼稚園内だけでは出来ないような体験を思いっきり楽しもう！」これは私たち年中組スタッフがこの一年に掲げた大きな目標です。

今年度の年中組は、学園幼稚園への入園窓口が三年保育のみとなった初めての学年。つまり六十人みんなが“進級児”となる初めての年中組なのです。全員が年少組での一年間の園生活を経験しているので、子ども達の中には生活の基盤がしっかりと根付き、幼稚園生活への安心感や楽しさも育っていました。そんな子ども達と迎える日々だからこそ掲げられたのがこのテーマなのです。

まず一学期には学園付近の公園（下岡公園・桜小路公園）に歩いて出掛けました。いろいろな標識に気付いたり、友達同士手を取り合って歩いたことで、交通ルールや公共の場でのマナーについてみんなで考えるきっかけができました。

二学期には幼稚園バスに乗って鵠沼海岸（九月）・八部公園（十月）・大庭城址公園（十一月）にも出掛けました。普段スクールバスに乗っていない子にとっては、憧れの園バスに乗れるとあって朝からワクワクドキドキ大張り切り！一方、毎日バスに乗っている子達にとっても大好きなクラスのみんなと乗車できる喜びは格別のようで、**車内では元気な歌声が弾み笑顔もいっぱいにあふれて**いました。

行った先々ではたわわに実った柿やコスモス畑、フカフカ落ち葉の絨毯など、いろいろな“秋”を見つけ、帰る頃にはお土産もいっぱい！広～い空の下で体も思いきり動かし、身近な環境の中で自然を感じながら目一杯楽しんできました。

拾ってきたどんぐりは笛やコマを作ったり、炒って味わってみたりしました。また、海で見つけた小石は色を付け、箸置きへと変身！毎日のお弁当時に使うのはもちろんのこと十一月の制作展にも展示しました。

園外保育後の幼稚園では、自分達でイスを並べてバスを作り、楽しかった余韻を味わうかのようにバスごっこをして遊ぶほほえましい姿も見られます。回を重ねる度に、たくさんの刺激がその後の遊び・行事へと繋がり、子供たちの生活がより一層豊かなものになっている事がうかがえます。そして何より、友達と一緒に楽しい特別な時間を共有した思い出は子ども達にとっても、私たち保育者にとっても大切な大切な宝物になっていくことでしょう。

「自分たちの力で…」

年長組

十月十二日、らんらんにこにこんど〔運動会〕が、湘南学園アリーナで行われました。見せるための運動会ではなく、全ての子どもたちが主役の半日をここで過ごしました。

この会を進めていくのは、年長児の子どもたち。プログラムの司会、各種目の道具の出し入れから他学年のゲーム中の手伝いを、係りの仕事として担いました。

今年の取り組みにおいては、他学年がどんなゲームやダンスをするのか、他学年の教師に聞きに行き、情報を集めていくところからスタートしました。その中で、自分たちに出来る手伝いはどんなことだろうと、ひとつひとつのゲーム内容を見ながら考えていきました。昨年の年長児の姿を見ていたので、今度はぼくたち、わたしたち年長組が、「らんらんにこにこらんどをリードしていくのだ」という気持ちを持ち、自分たちで情報集めをしてきたことを仲間に伝えたり、係りの仕事内容を考えたりと教師の手を必要とせず、積極的に取り組んでいく姿がみられました。

らんらんにこにこらんど当日は、全ての種目に意識を向け、自分の出番となると、素早く資材置き場や司会の舞台に向かって走っていく年長児。指示されて行動するのではなく、自分で決めた仕事を全うしようと、自ら行動する姿には目を見張るものがありました。

自分が運ばなかったら大切な幼稚園の仲間を困らせてしまうという相手を思う気持ちからの責任感。自分たちは年少児、年中児からも頼られているんだ、幼稚園のリーダーなんだと、自分の力に誇りを持って取り組もうとする姿勢の両方の気持ちがあったのではないでしょうか。

終わりの会では、自分たちの力でやり遂げたという達成感と満足感を感じさせる、子どもたちの笑顔が溢れていました。

創立75周年記念行事の概要

1日　時
平成20年11月15日（土）
学園創立記念日
記念式典：18：00～18：40
祝　宴：18：50～20：30

2場　所
ザ　ホテル　オブ　ラファエロ湘南
（藤沢市南藤沢）

3出席者
（1）来賓　44名
招待出席者
県民部学事振興課　課長　水田　豊人様
県私立中学高等学校協会　理事長　高木　茂様
県私立中学高等学校協会　副理事長　渋谷　一郎様
同協会理事・聖光学院中学高等学校　校長　工藤　誠一様
県私立中学高等学校協会　事務局次長　長谷岑二郎様
浅野中学高等学校　校長　淡路　雅夫様
横浜雙葉中学高等学校　校長　千葉　拓司様
洗足学園中学高等学校　校長　前田　隆芳様
神奈川大学附属中学高等学校　校長　澤田　敏志様
桐光学園中学高等学校　校長　伊奈　博様
森村学園中高等部　校長　高橋　敬三様
鎌倉学園中学高等学校　校長　竹内　博之様
横浜富士見丘学園中等教育学校　校長　豊岡　稔様
神奈川学園中学高等学校　校長　湊谷　利男様
法政大学第二中学高等学校　校長　榎本　勝己様
県私立小学校協会　理事　澤田　信親様
桐光学園小学校校長　斎藤　滋様
清泉小学校　校長　齋藤　一子様
鎌倉女子大学初等部　部長　鈴木　洋様
平和学園小学校　校長　岡崎　一実様
横須賀学院小学校　校長　塩田　征雄様
聖セシリア小学校　副校長　渡辺　勝之様
湘南白百合学園小学校　教頭　澤野　誠様
市私立幼稚園協会　会長　大竹　貞代様
市私立幼稚園協会　副会長　大貫　治子様
他、卒業生県会議員、後援会設立準備委員、同窓会幹事等
（2）学園　51名

4記念式典式次第
（1）開式の辞（藤岡学園長）
（2）主催者代表挨拶（小田理事長）
（3）来賓代表祝辞（3名）
県学事振興課長　水田豊人様
県中高協会理事長　高木　茂様
浅野中高校長　淡路雅夫様
（4）学務報告（古市常務理事）
（5）小学校建設等報告（林常務理事）
（6）藤沢市長メッセージ披露
（7）閉式の辞

5祝宴次第
（1）開宴の辞
（2）主催者挨拶（神谷副理事長）
（3）来賓代表祝辞（3名）
県中高協会理事・聖光学院中高　校長　工藤誠一様
県私立小学校協会　理事　澤田信親様
市私立幼稚園協会　会長　大竹貞代様
（4）乾　杯（同窓会会長　佐藤　允）
（5）会食・懇談
（6）閉宴の辞

以上

学校法人から

【湘南学園教育費援助のご案内】

制度の概要

＊対象者
本学園の幼稚園及び各学校に1年以上在籍する児童生徒の保護者が利用できます。同一家族で複数の申請を行うことも可能です。授業料を滞納していないことが条件ですが場合によっては貸与されることがあります。

＊募集期間
年間を通じて随時募集しております。

＊他の制度との併用
他の公的制度との併用は可能です。

＊援助年数及び援助額
・学園在学中に延べ3年が限度で1年ごとに更新手続きが必要です。
・校納金のうち「授業料」が毎月援助されます。
・授業料以外の学年費や積立金等は対象外となっていますので、毎月20日前後に銀行振込していただきます（毎月の振込額は一覧表にしてお渡しいたします）。

＊返　済
原則として適用を受けた児童生徒が25歳の誕生年の3月末日に一括返済していただきますが、卒業時に協議によって分割払いの方法も採用できます（いずれも無利息です）。

その他
細部につきましては、直接ご説明いたします。先ずは電話連絡の上、事務室窓口にお越しください。
（電話番号：0466-23-6611）

今後の予定

【12月】
2日　小　まとめのテスト（～3日）
中高　後期中間・学年末試験（～6日）
6日　幼　もちつき大会
12日　小　個人面談（～13日）
13日　幼　年少登園・吹奏楽部コンサート
中高　第3回入試説明会・生徒休
16日　幼　終業の日
小　終業式
17日　幼　第1回新入保護者会
小　5年スキー教室（～20日）

【1月】
8日　幼　始業の日
小　始業式
中高　授業開始
24日　幼　第2回新入保護者会・休園
27日　中高　合唱コンクール

【2月】
2日　中　中学入試（3・6日）
14日　小　制作展・器楽発表会
21日　幼　年長休園
小　半日入学・児童休校
26日　幼　お別れ遠足（年少・中休園）

【3月】
2日　中高　学年末試験（～6日）
5日　小　5年学年末テスト（～6日）
7日　幼　休園・半日入園日
高　卒業式
17日　幼　卒業の日
18日　幼　修了の日
小　修卒業式
21日　中高　終業式